

ばその同時に製せられたことを知り得る。宗教畫四幅には何れもその傍に拉丁文の説明ありその(一)は海岸にて人の溺れむとする所へキリストの現れたる圖にして、これ馬太傳第十四章第三十節なるキリストミペテロとの問答なることもその拉丁文の説明文にて明である。(二)はキリストが現れて二人の懷疑者を信仰に引き戻せる圖、(三)はソドマイト人がロトの家の二女を強奪せむとする所へ二人の天使が現れて神罰を課し暴徒を盲目とする圖にてこれゲネシス第十九章に見ゆるもの、傍の拉丁説明文にも暴徒が毆られて放逐せらるゝなりと説明してある。(四)はマリアの像にして上部に天主の二字の羅馬字注音を書し、下部に非常の信仰を以て此のマリアの圖を畫く云云の拉丁文が記されてある。而してモニョーラ・ド・シ・アンチニヤとあるは恐くはその畫工の姓名ならむかみ考へられる。前述の(甲)(乙)(丙)の文章はそれ／＼此の(一)(二)(三)の三圖に相應する漢文の法語にして、而も漢字の音も示さむが爲に傍に羅馬字を附記したものである。四文共に支那風に撰者の題名の後に卵形ミ方形ミの

二印を捺す、何れもJHSの陰文で、利碼竇が支那風俗に順應して布教することに努めた用意の程が充分に察せられる。尙ほ本書の終には羅馬字注音のみにて漢文を闕ける一文を附載してあるが、之は萬曆三十六七年頃印行せられた汪廷訥の坐隱訂譜所載のもので、汪氏の自跋に萬曆三十三年利碼竇より贈り來りしものとあるが、その詞句の意は少しも通じない。之は實は(丁)利碼竇贈程大約文及び(甲)信而歩海疑而郎沈の篇の羅馬字注音をばその意味を考へずして無暴に割裂轉載したもので、詞句の意の通じないのも當然と謂はねばならぬ。陳垣氏の跋文には審かにその錯誤の經緯を考證してある。兎に角本書の景印は已に佚せしものと想はれて稀觀の史料を學界に提供したもので陳垣氏の勞を多しせなければならぬ。

〔那波〕

● 日本考古學 後藤 守一 著

輒近日本考古學研究の進歩著しいものがあり、殊に朝鮮方面に於ける斯界の開拓は多大の刺戟を與へて大正初

頭から擡頭せる斯學の發展は著者の序言を待つまでもなく誰れ人も首肯する處であらう。而して其間、遺物遺蹟の論著報告は益々微に入り細を極め斯學者云へさも綜合的見解を見るに苦しむものである。東京帝室博物館にあつて大正初頭以降の斯學の發達に關與する便宜の地位にある著者にして、本著を編する蓋し其の人を得たりとすべきであらう。而かも著者がこれを編述するに當つて最も據るべき資料と論著とに基いてゐる點は更に本書を價值づけるものである。本邦の考古學發達史上に一轉機をなさしめたる大正時代の綜合的見解を知る上に於て本書の出現を感謝するものである。本著はこれを序説、先史時代、原史時代、考古學研究法の四編に分ち考古學一般の目的から説述し各時代の遺物遺跡を細叙し最後に其の研究法を以て結んでゐる。四六判本文三三三頁に加ふるに豊富なる挿圖を以てして居る。(定價三・八〇、東京四海書房發行)

● 日本原始繪畫

文學博士 高橋 健自著

大正十四年七月以降去歲七月まで「國華」誌上に斷續所載せられたものに一二の新編を加へ茲に單行本として出版されたものである。四六版本文百八十三頁挿圖百十三を包括してゐる。兩編に分ち先史時代に「土器に於ける薄肉彫及び線畫」「銅鐸に於ける線畫及薄肉彫」を第一編とし、「埴輪及陶器に於ける線畫」「鏡脊に於ける薄肉彫」「金具に於ける線畫」「古墳墓の壁畫」を原史時代にさされてゐる。以上の各章に於いて圖畫の構成類形等を説及するに細密なるものあつて、鮮明なる圖版を相待つて本邦の原史繪畫の構成を綜合的に見るこゝが出来、日本原始繪畫の集成圖録としても永久に價值づけられるものである。(定價三・八〇、東京大岡山書店發行)

● 梁山夫婦塚と其遺物

朝鮮總督府發行

去る大正九年十一月、朝鮮慶尙南道梁山郡梁山面北亭洞の群集墳中の一横口式石室發見遺物を細叙するもので古蹟調査特別報告第五冊として出刊された。本墳に次いで金冠、金鞋、金鈴、瑞鳳の各塚が南鮮慶州に於いて發

堀調査せられ東亞の考古學界に多大の刺戟を與へるものがあつた。本墳は此等に先行して發掘せられ今までの調査報告に接するものであるが本墳が家族墓として構造され、其の埋葬當時の状態を保存することに於いて就中裝身具の狀況を知るに最も貴重なる資料を與へてゐる男子の金冠、純金耳飾（太輪）頸飾（青色）銀指環、銀銚帶金銅沓、環刀太刀、に對し婦人には寶冠（樺皮製銀前立附）耳飾（細輪）頸飾（色彩に富む勾玉、切子玉、空玉等）銀釧、腕玉、銀銚帶、金銀裝刀子等であつて、互に共通するもの以外には性別によつて加作されてゐる。而して本墳は古新羅時代の西曆六世紀前後のものに認められ、慶州に點在するものと同様の墳築をなすものである裝身具の副葬状態を明らかにすることに於いて基本的例示を與へるものと云へる。精細なる圖版は本文を補充するに餘りあるものがある。（四六四倍版本文八六頁、圖版四十一葉）（以上島田）

●日本民家史

藤田 元春著

從來専門學者の研究對象とした我國の建築史は、宮殿樓閣にあらずんば神社寺院乃至は大名屋敷であつた。それらのものは、或は實物の現存するもの多きにより、或は文獻上に於ても相當の史料を残して居るので、その研究はある程度までは容易であつた。之に反して、吾人の生活に最も深き關係を有する民家の研究に至つては、民家そのもの、性質上二三百年以上の存在が稀であるのみならず、文獻の上に史料を求める事も容易ではなく、從つて建築史家の視界からは疎外されつゝ、今日に及んだものである。然るに近時、史界の傾向につれて、農村の研究が重要視されるに至り、民家の如きも漸く學者の視野に映じ來るに至つた。

著者は人文地理專攻の學者であつて、民家の研究に思を潜める事十年、殆んそ全國に亘つて實地を尋ねる傍ら或は古文書に、或は繪畫に、或は發掘品に、民家に關する資料を涉獵しこれを諸外國のそれと對照して茲に一卷の書となし、世に問うたのが本書である。

第一篇では、屋根の形態並びに葺方を細説し、第二篇